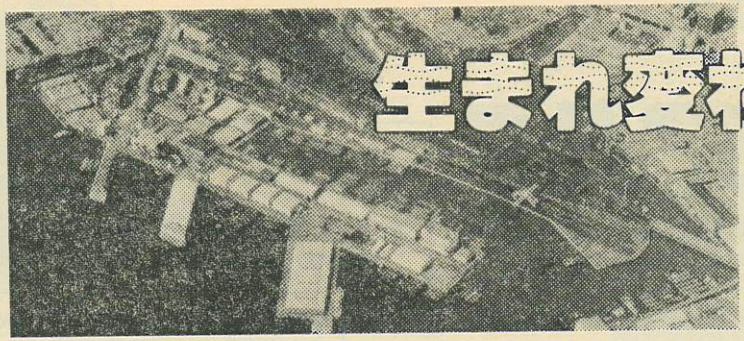


生まれ変わる高島ふ頭

半世紀以上の歴史に幕

横浜駅と関内地区間の海沿いの部分では、都心部の強化と国際文化都市を建設するナショナルプロジェクト、みなとみらい21事業の工事が進められていますが、埋立て工事の進ちょくに伴い、みなとみらい21地区に予定されている高島ふ頭の供用が今月末で廃止されることになりました。そこで高島ふ頭の歴史と将来を紹介いたします。

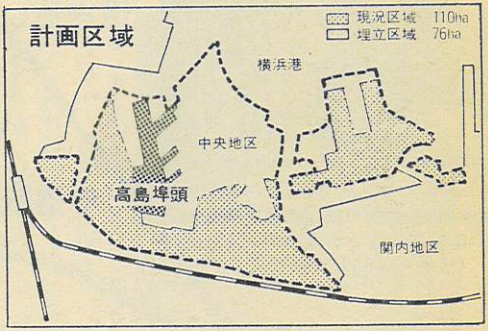
主要ふ頭として活躍

高島ふ頭の歴史は古く、その一号・二号桟橋は大正十年から昭和八年にかけて建設されました。当時、新港ふ頭と大桟橋が外国貿易専用であったのに対し、高島ふ頭は山の内ふ頭と並んで内国貿易専用の桟橋として使用されており、また、南洋航路船も係留していました。

戦後は、ほとんどの施設が接収されましたが、昭和二十二年に一部が接収解除されたのを始めに昭和二十八年一月までには全ての施設が解除されました。翌二十九年には三号桟橋を完成させるなど施設の整備にともなって、東南アジアや中近東方面を中心とした全世界の航路船に使用されました。昭和三十六年度には入港隻数は千二百六十五隻、総貨物取扱量は三百三十三万五千トンにもおよんでいます。

このように、高島ふ頭は横浜港を支える重要なふ頭として活躍してきましたが、新港ふ頭の接収解除や山下・本牧ふ頭の完成により、昭和三十六年ごろをピークに取扱量はしだいに減ってきました。

高島ふ頭には、また、客船ふ頭としても、木更津（昭和四十七年まで）や大島航路があり、多くの人たちに行楽船の発着港として利用されてきました。



将来みなとみらい21中央地区に

この地区では、二十一世紀にふさわしい街づくりをするため、高島ふ頭を含むみなとみらい21中央地区の護岸工事が昭和五十八年から行なわれています。この工事も順調に進み、今年の五月ごろには高島ふ頭前面の海域全体が航泊禁止区域になる予定です。これにともなって、半世紀以上の歴史を持ち横浜港を支えてきた高島ふ頭の供用は今年三月末をもって廃止されることになりました。そのため、大島への船便は二月一日より大桟橋から出航しています。

この高島ふ頭の地は国際交流地区や公園・緑地としての利用が計画されており、国際文化都市横浜の発展へますます貢献して行くことになります。